

(2015年9月17日受稿 2015年11月26日受理)

【研究ノート】

高谷清の重症児療育観 ——「ヨコへの発達」に着目して——

垂髪 あかり (神戸大学大学院人間発達環境学研究所博士課程後期課程)

連絡先 E-mail: akasuzu720@gmail.com

【要旨】

「びわこ学園」の「いのち」「『ふつうの生活』」「まちづくり」をキーワードとした新理念に、第二代園長である高谷清の思索・思想が及ぼした影響は看過できない。そこで本稿では、高谷清の重症児療育観について、1970年～2015年の高谷の著作物199件を分析し、「ヨコへの発達」の関連記述に着目して療育思想の形成過程を時期区分し検討した。重症児療育及び「ヨコへの発達」に出会った第1期、高谷は「びわこ学園」の実践で追求されていた「“よこへの育ち”」に開眼され、積極的に取り入れた。「第一びわこ学園」で重症児療育に取り組んだ第2期、高谷は重症児の「いのち」や「心」、「生きることの意味」を問うなかで「人間としての発達」を重視し、それは学園の理念や実践と一致した。両者は一丸となって重症児の「いのち」を守り、「快適な状態」の保障を志向した。第一線を退いた第3期、高谷は「ヨコへの発達」を「ヨコへの広がり」と言い換え、「人間存在」を表すものとして「タテ」「ヨコ」「フカサ」を提起した。学園では、新しい療育理念の下、「QOL」、「生活」、「地域」のなかの重症児や学園という捉え方を打ち出した。高谷の思想・思索と学園の理念及び実践は重症児を核にしながら往還し、そこで追究された「いのち」や「快」、「生活」の保障、「心」や「生きる」ことの意味への洞察は、「発達保障」の思想とともに現在においても「第一びわこ学園」の療育実践の本質をなしている。療育の対象が質的に変化した「第一びわこ学園」において、高谷の到達した「ヨコへの広がり」は、超重症児を含んだ療育思想として新たな可能性を持つものである。

I. はじめに

「第一びわこ学園」(現、びわこ学園医療福祉センター草津, 滋賀県) は、1963年に創設された「びわこ学園」の「発達保障」思想のもと、重症心身障害児(以下、重症児とする)の無限の可能性が実践的に探究・証明された場所である。当時志向された「発達保障」とは、子どもの「“たて”への育ち」とともにある「“よこ”への育ち」(岡崎ほか, 1966)を重視したものであり、ここでは子どもの「内面」を「ゆさぶり」「ひきだし」ていくような実践に力が注がれていた(社会福祉法人びわこ学園, 1978)(社会福祉法人びわこ学園からの出版物に関しては、以下、(びわこ学園, 発行年)と記す)。この「“よこ”への育ち」(後の年報等では「“よこ”への育ち」と同様の内容が「ヨコへの発達」と表記されている、びわこ学園, 1978)を含意する「発達保障」の思想は、創設から半世紀以上経った今なお受け継がれ、実践が重ねられている(びわこ学園, 2012)。

一方で、2002年に示された新しい「びわこ学園の理念」には、「発達保障」や「ヨコへの発達」という文言はなく、「いのち」「『ふつうの生活』」「まちづくり」というキーワードが提起されている。こうした新しい視点の獲得の背景には渡部(2004)の指摘にあるように高谷清園長時代に学園内で提起された「いのち」, 「心」, 「QOL」という側面や、牧野(2013)の指摘する「生命の尊厳」と「人間の尊厳」という側面から重ねられた実践が関連していることが推測される。

高谷清は、1977年から1997年まで第一びわこ学園に在職し、そのうち1984年から13年間園長を務めた(表1)。現在に至るまで、およそ半世紀近くにわたって重症心身障害児の医療

表1 高谷清の略歴

	できごと
1937年	京都府に生まれる
1964年	京都大学医学部卒業
1965年～	京都大学付属病院, 大津赤十字病院, 京都吉祥院病院小児科に勤務
1977年	重症心身障害児施設第一びわこ学園勤務
1984年	第一びわこ学園園長
1997年	退職
2000年～ 2002年	立命館大学客員教授
2011年	ベスタロッチ賞受賞
現在	びわこ学園医療福祉センター草津非常勤医師, NPO法人きらら作業所(草津)理事長

*高谷清(2013)「重い障害のある子どもが大切にされる社会の大事さ」『しがの保険医』第332号, p.2をもとに垂髪作成

に携わってきた高谷は、医師としての功績のほか「第一びわこ学園」の将来構想を検討・実現させたことや、その過程でノーマライゼーションの思想と実践を取り入れ、施設実践に新しい風を吹き込んだこと、「抱きしめてBIWAKO」ⁱを成功させ、「いのち」を大切にす思想・運動と社会の意義を提起したこと等で知られている。しかし、高谷自身については、糸賀一雄の「この子らを世の光に」という思想を受け継ぎ伝える者として取り上げられる側面(小坂, 2005)(牧野, 2013)や、田中昌人の提唱した「ヨコへの発達」について検討した者として取り上げられる側面(加藤, 2007)のほかからは先行研究がなく、「第一びわこ学園」の実践及び理念形成に影響を及ぼした高谷の思索・思想について改めて検証する意義は大きいと考えられた。

そこで、本稿では、高谷清が「第一びわこ学園」に関わり、当時の実践を総括していた1977年～1997年の時期に加えて、その前後の高谷の思索・思想を「ヨコへの発達」という側

面から検討し、その重症児療育観を明らかにしたい。

1970年から2015年までの高谷の著作物197件を網羅的に分析し、それらの中から医学論文12件、公害に関する文献6件、書評その他に関する文献20件は確認の上除外し、161件(本稿末表2)の論考を検討した。その際、高谷の療育思想の形成過程から、第1期：重症児療育・「ヨコへの発達」との出会い(1970～1976年)、第2期：びわこ学園における重症児療育実践～「人間的な発達」の追求(1977年～1997年)、第3期：「ヨコへの発達」から「ヨコへの広がり」へ(1998年～2015年)に区分し、それぞれの時期の実践と療育観に係る「ヨコへの発達」の関連記述を抽出した。

ここで、第1期は、「重症児療育」という領域と「ヨコへの発達」に出会う、高谷がびわこ学園に着任するまでの時期とし、第2期は、高谷がびわこ学園において重症児への療育に身を投じ、様々な思索を経て療育観を醸成させてゆく時期とし、第3期は、第一線を退いた高谷が「ヨコへの発達」について独自に展開し、その療育観を確立させた時期として区分を行った。なお、必要に応じて高谷自身への聞き取りも行い、第1期から第3期にわたる「ヨコへの発達」に係る高谷の思想・思索について詳述してもらった。そのインタビュー結果及び考察についても、高谷本人に確認済みである。

Ⅱ. 第1期：重症児療育・「ヨコへの発達」との出会い(1970～1976年)

1. 重症児と呼ばれる「子ども」との出会いと『変革の医療』の志向

「病院では病気を診ていたが、びわこ学園では子どもを見るようになっていた」(高谷, 2011a)と述懐するとおり、開園後3年目を迎

えたびわこ学園で高谷は重症児と出会った。当時の学園は、未開の重症児療育に挑み、その方法が試行錯誤された結果、ようやく子どもたちへの関わり方の糸口が見出されようとしていた頃であった。日常生活の細かな場面での関わりを通して、子どもの「内面に入り込」(びわこ学園, 2013)み、「ゆさぶる」(同)という努力がなされ、職員の子どもへのかかわりは「世話から療育へ」(びわこ学園, 1983a)と変わりつつあった。びわこ学園で重症児の日常「生活」を知った高谷は、医師としてそこに住む人々の「怨嗟の心」(高谷, 2011a)を観取していた。

1970年代初頭の障害者医療には、「病気」の治療はするが、「障害」はその対象外であるという現状があり、当事者やその家族、関係者たちの多くはこうした医療に対して怒りを持っていた。それを知った高谷は、「『人間』不在」の医療ではなく、「障害者の全面発達」を保障する医療への「変革」の必要性を強く感じるようになっていった(高谷, 1971)。

2. 「ヨコへの発達」概念との出会い

そして高谷は、「びわこ学園」で追求されていた「よこへの育ち」(岡崎・小池・森, 1966)を目指した療育に出会う(高谷, 1971)。そこには医師である高谷自身が身を置く医療界とは相反する理念があり、高谷は「よこへの育ち」という捉え方の斬新さに驚いた。「発達というとき、タテへの発達とでもいえるこの発達のみちゆきの高次化と、ある発達段階でのヨコへの発達の広がり(交換性)があり、この両方を総合して発達である」(高谷, 1972)という言葉は、「障害者医療」にその視点を取り入れんとする高谷の姿勢を如実に表していた。

高谷は「病気」のみを対象とする当時の医

学・医療をなんとか発達と結びつけ、「発達をおしすすめる医学・医療」を築くことを指向した。そして「タテへの発達」とともにある「ヨコへの発達」の重要性を示し、「そういうふうなヨコへの発達というか人格の発達というようなものがある、そういうものを合わせて総合的に人間の発達がある」（高谷、1976）と積極的に「ヨコへの発達」について述べたのであった¹¹。

3. まとめ

第1期、高谷は「ヨコへの発達」という発達の捉え方と出会い、それを積極的に取り入れていった。高谷が出会った「びわこ学園」の実践とそこに居た子どもたちの姿は、「人間不在」とされた当時の医療を乗り越えるものとして高谷を開眼した。すなわちこの時、「びわこ学園」の実践が高谷自身に大きな影響を与えたといえる。「タテへの発達」の指す共通性・普遍性と「ヨコへの発達」が示す無限性——この新しい「発達」観を医学・医療にも取り入れ、高谷は「発達をおしすすめる医学・医療」を積極的に志向したのであった。

Ⅲ. 第2期：びわこ学園における重症児療育実践～「人間的な発達」の追求（1977年～1997年）

1. 「人間としての発達」の追求

びわこ学園の常勤医師となった高谷は、学園の外来診察を再開した。同時に、重症の子どもたちと向き合いながらも医学的な取り組みが中心で発達の視点を欠くことが多い当時の医学に対して強い問題意識を持ち続けていた。そして「発達」、とりわけ『「障害児の発達」ではなく、人間としての発達』（高谷、1980a）に目を向けていく必要性を複数の論文で主張している

（高谷、1980a、1980b）。

「人間としての発達」とは、「認識の高次化」（高谷、1980b）の方向とともに「横への発達」と言ってもいいような、人格の形成」（高谷、1980b）であるというのだ。つまり、「共感する気持ち」や「やさしさ」等の「人間的な感情」がその具体例であり、それは「人間としての発達」の絶対条件でもある。人間の生きがいや個性の発揮、自己実現にかかわる「人間としての発達」の保障を訴えることで、高谷は当時の医学に疑問符を投げかけたのであった（高谷、1980b）。

2. びわこ学園の子どもたちの「確実な『変化』を前にして」

1980年、びわこ学園では「私たちの障害児療育の理念」が提示された。「人はすべての人間として生き、人間としての発達の道を歩む。」（びわこ学園、1988）で始まるこの理念は、発達の権利やこれまでの実践から見出した「発達保障」の在り方、学園の社会的役割、職員の労働条件等、14か条から構成される。その11条目では、高谷の訴えを具現化するかのように「人間的な発達」の保障の必要性が述べられている。

びわこ学園創立20周年目に、高谷はこれまでの学園の実践とそこからみえてきた思想をまとめた（高谷、1983a）。重症児たちの「生きる力へのとりくみ」（高谷、1983a）を記し、一見変化のない子どもたちにも長い目でみると「確実な『変化』」があるとした。更衣、洗面、食事、清潔保持、排泄とその間にある「健康増進」（高谷、1983a）のとりくみ——日々重ねられる何気ない「生活」が、彼らの「生きる力」を強めるのに重要であり、「生活」のなかでみられる職員と重症児との人間的接触こそ保育そのものでもあることを指摘した。

一方で、「身体の機能がたいへん悪く、生きていることがたたかひであるような状態」（高谷，1983a）である重症児を前にして、高谷は何をどう取り組んだらよいのかと混迷の中にもいた。

この時期、学園では年少で虚弱な重症児たちの入園が続き、「園児の生命を守り、生命をつよめるといったとりくみ」（びわこ学園，1981）が追求されていた。「いのちをまもり、いのちをつよめる」「友だちや大人（職員）との豊かな関係をつくりだす」（同左）ことを目標とし、生理的基盤の確立と子どもたちの「心の動き」とリズムに寄り添いながら調子のよい時に働きかけるといった緻密な取り組みが重ねられていた。こうした努力の末に見られた子どもたちの「変化」を前に、高谷のなかには一つの確信が宿りつつあった。

3. 「生きいきした世界」をより豊かに、「生きがい」の追求

「彼らはねたきりでまったく何もわからないと思えるのに、実は敏感で感受性が豊かなのです。療育者は彼らのちょっとした変化から、その意味を感じとり読みとっているのです。感情ではないが感情になるもの、言葉ではないが言葉になるもの、それはテレパシーかもしれません」（高谷，1983a）と高谷は子どもを捉えていた。関わり手がそれを観取し、それに「共感」し得たとき、「彼らとの対話」が可能になり、そこに「生きいきした世界」が生まれる（高谷，1983a）。そして、重症児と療育者との「生きいきした世界」を、より豊かにしていくために、重症児と関わり手との「共感」関係を全ての取り組みの基本に据えて、彼らの「精神活動を豊かにしていくこと」を、高谷は職員と一丸となって目指したのであった。

ところが、それは同時に重症児の身体に大き

な負担と強いることにもなり、状態が急変し、何か月もかかってようやく回復したと思った矢先にまた同じことを繰り返すという事態が続いた。高谷は苦悶していた。「行きつ戻りつ」（高谷，1983b）で苦しい状態の園児を目の当たりにして、一体どこに療育目標を設定すべきか。そして、懊悩の末に見えてきた答えは、「行きつ戻りつのなかに人生がある」ということであった（高谷，1983b）。

こうした経験を経て、高谷は、重症児たちの心身の安静や治療に取り組むだけでなく、「その子が人間として生きていることをしっかり見つけ、生きがいというものにとりくんでいかねばならない」（高谷，1983b）とし、「人間存在」そのものについても思索を深めていく。

4. 重症児の「いのち」と「心」に触れて～「人間的な発達」の追求

さらに、高谷には重症児たちが「どのような気持ちで生きているのだろうか、どんな心を抱いているのか」（高谷，1983b）と、なんとか重症児の「心」に触れたいという思いがあった。その思念は、高谷を人間の「心」とは何かという命題に誘っていき、「心」というものの実態を重症児（者）一人ひとりの生活や人生に触れるなかで洞察し続けた。「心、この揺れ動くもの、不確かな実体。振動、流動、拡散、収縮、飛躍、激転……連綿としてつづいてきた生命の歴史のなかで、はじめて個体より拡張するエネルギー『心』を得た人間という名の生物。…（中略）…心は、しかし無限定であり得るか。いや、無限定といえない部分を心はもっている」（高谷，1983b）と、その定義は依然として定まらない。しかし、どのように重い障害があっても心は生きており、それを耕す必要があるということだけは、自らの経験から納得できるのであった。

この頃から、高谷は、「ヨコへの発達」という言葉に代わって「人間的な発達」という表現をするようになる。「共感」という基本姿勢を踏まえて、彼らをいかに「快適な状態」にするかを目指すなかで見出した視点である。高谷の言う「快適な状態」とは、「存在そのものがない状態」（高谷、1985）、すなわち子どもの身体の内外部条件と環境等の外的な条件を、心地よい状態にすることを指す。それに加えて、「人間的な快適さ」や「人間的な発達」を追求する。こうして重症児に取り組む者は、重症児の極微の変化から、彼らの要求を読み取ることができるようになり、「その子」の「心が見えてくる」と高谷は言う（高谷、1985）。

さらに、重症児との実践から見えてきたものとして「いのち」というもう一つの視点を挙げた。「（状態の急変時）マウスーツーマウス（口一口人工呼吸）をやります。そのときに、今やめたら死ぬというのはわかっている。それをやって生き返る、あるいは酸素につなぐ。そのときに、いのちが燃えているなというか、汚い体、痩せた身体からいのちだけが取り出されて、いのちだけが光っているというか……」（高谷、1985）それは、極限状態で「いのち」の決死の燃焼を見るという医師としての高谷独自の視点である。

その頃、学園では、年少の虚弱児に、長期にわたる状態悪化、生死の闘いと医療チームによる懸命の救命活動が行われていた。当時の事例では、ある重症児の繰り返される不随意運動の強弱に職員が気づき、苦痛や不快でそれは強まり、不快要因をとりぞくと弱まることが明らかにされていた（びわこ学園、1983b）。こうした取り組みを通して、学園内部でも「生命を守り、健康をつくる」（びわこ学園、1983c）という「健康増進」（同）の必要性や身体と心を統合して捉え、「快適な状態をつくりだしてい

くこと」（同）、その過程で築かれる人と人との「関係の育ち」（びわこ学園、1983a）を支えていくことが確認されていた。

5. 重症児に取り組むことの意味とは

重症児の「いのち」と「心」に向き合う日々を重ねながら、高谷は、自身も含めた「重い障害をもつ子にとりくむ人間の営み」についても洞察していた。それは、障害者と関わる人類史^{III}を想起させ、進化の過程において人間は、本性として「協力・協同・分配そして連帯」（高谷、1987a）を「人間共通の心」（高谷、1989）として持っていたことを明らかにした。その背景には、1987年に成功した「抱きしめてBIWAKO」がある。びわこ一周を人の手でつないで、生命の象徴ともいえる「びわこ学園」と、いのちと自然を象徴する「びわ湖」を同時に抱きしめようという趣旨のもとで、約21万3000人（びわこ学園、1998）が参加した。多くの人々が障害児に心を寄せたその体験と感動を通して、高谷は人間本来が持つ「心」を達観するに至っていた。

同時期、学園は短期療育事業（1986年）を開始し、在宅の重症児（者）を病棟で受け止めることが増加していった。また、児童相談所における重症児（者）の巡回訪問（1987年）や地域での「介護セミナー」開催（1987年）、通園事業開始（1990年）など、施設と地域を繋ぐ実践を積極的に行っていた。

1991年、草津へ新築移転した「第一びわこ学園」が直面したのは、深刻な看護師不足と不安定な財政状況であった。園長として高谷がその苦境をなんとか乗り越え、ようやく3つの病棟が稼働したのは1994年のことであった。その後、学園では園生の障害の重度・重症化が急速に進み、日常的に濃厚な医療的ケアを受けながらも、生きる意欲を絶やさないうための療育が

指向され、「QOL」(Quality Of Life) (びわこ学園, 1995) 向上のための援助方法が探求された。

6. まとめ

第2期は、「第一びわこ学園」の実践を通して、高谷自身が療育観を醸成させた時期であると言えよう。目の前にいる子どもの「いのち」や「心」、そして「生活」を支える立場から捉えた重症児の「発達」には、「人間としての」という視点が欠かせないものであった。反応が捉えにくい重症児を前に、「何を、どう取り組んだらよいか」と焦燥感にかられる日々のなかで、高谷は、彼らの「生きることの意味」を問い続けた。こうした懊悩の末に高谷とびわこ学園職員たちが見出した答えは、療育のなかで彼らの「存在そのものの快」を目指していくことであった。そして、そのために「共感」や「信頼し合う関係」をすべての取り組みの基本とした。一人ひとりへの療育実践を通して得られた人間としての絶対的な「いのち」の存在への気づきを基底に、重症児の「心」、さらに地域へと視点を広げて「人間の共通の心」に迫ろうと、高谷が思索を重ねたのがこの時期であったといえる。

こうした高谷の思念と「存在そのものの快」を目指すという到達点は、びわこ学園全体のものであったといえる。すなわち、学園の実践が高谷の療育思想を形成し、同時に、園長として実践を統括していた高谷の思索が実践に影響していたと考えられる。

「ヨコへの発達」という言葉は、第2期の初期に3編の論文のなかで、田中昌人の「発達」理論を解説する形で語られたに過ぎない。実践のなかで重症児の「いのち」と「心」に触れるにつれて、高谷の著作物のなかでは「ヨコへの発達」という表記は姿を消し、それに代わるも

のとして「人間的な発達」という記述がなされるようになる。それは学園の理念にも明記されている言葉であった。学園の実践と高谷の思想が呼応しながら、高谷の療育観も変容しつつあった。

Ⅲ. 第3期：「ヨコへの発達」から「ヨコへの広がり」の提唱へ（1998年～2015年）

1. 「人間」存在について～「ヨコへの発達」から「心の深まり」へ

園長退任後も、高谷はびわこ学園での診察を継続した。そして、重症児・者との関わりを続ける傍ら、これまで熟考しつづけてきた「発達」や「ヨコへの発達」については独自の展開をするようになっていった。

第2期を通して追究してきた「人間」存在について、高谷は一定の結論を出した。それは、人間は「身体（からだ）、認識（知能）、感情（こころ）」の3要素から成り立つ。そして「人間の認識の発達のみちすじというのは誰も同じ」であり、人間の「心」のはたらきが豊かになっていくことについては障害の有無にかかわらず「差がない」ということであった（高谷, 1998）。

さらに、「発達という言葉をやや安易につかうのはよくないが」と断りながらも「もし認識の仕方（操作性）の発達を『タテへの発達』と言うとしたら、これは『ヨコへの発達』といえるかもしれない」としながらも、「しかし私とすれば『心の深まり』としたい」と言いきった（高谷, 1998）。このとき初めて、高谷は田中昌人の「『可逆操作特性の高次化』に対する『ヨコへの発達』」（田中ほか, 1967）とは違った意味合いで「ヨコへの発達」を「心の深まり」と言い換えたのであった。それは、実践の格闘を経て、高谷自身が「ヨコへの発達」概念につい

て得た答でもあった。

2. 「その発達の状態でヨコへの広がりといえ無限の世界が存在する」

2000年代に入ると「人間は発達してもしなくても人間なのだ」(高谷, 2003)と、びわこ学園での最終の歳月を迎えて「感じ方が変わってきた」(高谷, 2003)と自らを述懐している。

この頃、学園では、口分田政夫園長のもと、新しく「びわこ学園の理念」(びわこ学園, 2002)が提示されている。そこでは、「発達保障」の思想は継承されつつも、それを全面に提示するのではなく、「いのち」「『ふつうの生活』」「まちづくり」というキーワードが掲げられている。地域のニーズも引き受けながら、重症児者一人ひとりの「QOL」、すなわち生活や人生の質にも向き合い、「自己実現」に向けた療育の志向が宣言され、それをもって「発達や生活」(びわこ学園, 2012)の保障としたのであった。

高谷は、これまで「ヨコへの発達」と述べていたものを「ヨコへの広がり」として次のように表すようになる。「人間というものは、どのような重い障害があろうと、人間としての発達のみちゆきを歩むこと、上へ向かう発達には限界があっても、その発達の状態でヨコへの広がりといえる無限の世界が存在すること、そこに生きる喜びがあり、豊かな個性が形成される」(高谷, 2005)。なぜ、高谷は、「ヨコへの発達」を敢て「ヨコへの広がり」と言い換えたのか。その背景には、「発達」を唯一の目的とすることに対する高谷の危機感があり、これまでの重症児療育実践から「いのち」や「生き方」、人間同士の「関係性」により価値を見出していたことが考えられる。

これ以降、高谷の著作の中では、「ヨコへの発達」は、「ヨコへの広がり」や「ヨコへの豊

かさ」、または「ヨコへの広がり」と表記されるようになる。

3. 「『ヨコ』は豊かさの世界」～「タテ」「ヨコ」「フカサ」の提起

この「ヨコへの広がり」^{iv}の「ヨコ」とは「人間関係」を指し、生活の豊かさや生きがい、多様性、個別性を意味する。それは、「現在をそれぞれ自体として充実させる」ものであるから、「ヨコへの発達」と言わず「ヨコへの広がり」と表記するほうが適切であると高谷は主張する(高谷, 2007, 2015b)。

さらに、「タテ」と「ヨコ」の他に、高谷が長年考究し続けてきた「心」を含意した『フカサ』^vという次元を提起し、人間存在を3つの次元から捉えたのであった(高谷, 2009)。

4. 「ヨコへの発達」と「人格」の関係

この頃、高谷は田中昌人の提起した「ヨコへの発達」及び「人格」について改めて検証している(高谷, 2008, 2014)。そして「ヨコへの発達」を、「人格の形成の中身と密接な関係がある」(高谷, 2010)としながらも、「発達」と関連付けた「人格」概念の捉え方に反対する立場を表明し、存在自体の「かけがえのなさ」(高谷, 2010)や「尊厳」(高谷, 2015a)を含意する「人格」概念を主張した。

その根拠には、多様な分野で「社会的弱者」を排除する傾向にある社会に対しての高谷自身の強い問題意識があった。「人格」を有さないとする「生命」の抹殺を正当化する「パーソン論」(高谷, 2011)や安楽死、尊厳死、臓器移植につながる自殺補助等の孕む問題に触れ、それに対峙する「人格」論を展開した(高谷, 2013, 2015b, 2015c)。高谷の言う「人格」は、重症児者、新生児、終末期にある高齢者、病気や障害で意識がない状態の人にも存在す

る、「人間尊重、人間尊厳」(高谷, 2015c) の概念であった。

5. まとめ

第3期, 高谷はこれまでの「第一びわこ学園」での実践を経て, 第1期に「ヨコへの発達」と述べていたものを「ヨコへの広がり」と言い換え, その中身を明確にした。それは, 田中が提唱した発達理論における「タテへの発達」に対する「ヨコへの発達」とは違った中身をもっていた。「人間存在」を「タテ」(認識力・理解力・知能), 「ヨコ」(人間関係・個性), 「フカサ」(人類の共通性)として捉えた, その一つの次元として「ヨコ」であった。高谷のいう「ヨコへの広がり」は, 知能や障害とは無関係であり, その人の「生きがい」や「生きるよろこび」を表すものである。それはまさしく, 高谷が「第一びわこ学園」において重症児に向き合った実践のなかで, 療育目標として追求し続けてきたものであるといえる。

また, 「人格」概念についても, 第1期及び第2期には「ヨコへの発達」と同義的に捉えていたが, 第3期には明確に区別して, 「パーソン論」等社会的弱者を排除するような世界の思潮動向に強く対峙し, 人間存在の「尊さ」や「尊厳」を意味するものとして明示した。

こうした「ヨコへの広がり」や「人格」についての一定の答えは, 第一線を退いた高谷が, これまでの実践で子どもたち一人ひとりと向き合いながら考え抜いてきた思索の結晶である。それは, 「第一びわこ学園」の掲げた新しい理念と「QOL」を追求した現代の実践とも大きく重なっている。

IV. おわりに

本研究では, 高谷の重症児療育観を「ヨコへ

の発達」という側面から検討するために, 1970年から2015年に至るまでの高谷の著作物199編を検討した。その結果, 高谷自身の療育観の変遷に伴って著作物に記される「ヨコへの発達」が変化していく過程が明らかになり, 同時にそれは学園の実践と深く結びついていることが明らかになった。

「発達をおしすすめる医療・医学」を積極的に志向していた第1期, 高谷は「びわこ学園」の実践で追求されていた「“よこへの育ち”」という捉え方に出会い, これまでなかった「ヨコへ」という「発達」の捉え方とその中身に開眼され, それを積極的に取り入れていった。

しかしその後, 高谷は「ヨコへの発達」概念創出の場の一つであった「第一びわこ学園」に身を置き, 重症の子どもたちに真正面から対峙し, 重症児の「いのち」や「心」, 「生活」, そして「生きることの意味」を問い続けた。こうした実践の苦闘をくぐって, 園長の高谷と「第一びわこ学園」の「発達」の捉え方は, 「タテ」方向と「ヨコ」方向の「発達」というよりもむしろ, 「人間としての発達」という視点を重視するようになっていった。実践を統括していた高谷の思想と「第一びわこ学園」の理念や実践は一致し, 両者は一丸となって重症児の「いのち」を守り, 「快適な状態」を保障することを, この時期において志向していたといえる。

そして第3期, 高谷は「ヨコへの発達」を「ヨコへの広がり」と言い換え, 「人間存在」を表す一つの次元として「ヨコ」を「個性」や「人間関係」であると捉え, それは「生きがい」につながるものであると定義した。『「人間存在」の有り様』を「タテ」「ヨコ」「フカサ」とし, その上位概念として, 「人間存在」の「尊厳」を表す「人格」を置いた。「第一びわこ学園」においては, 新しい療育理念が提起さ

れ、「いのち」「『ふつうの生活』」「まちづくり」という視点が提示された。すなわち、「第一びわこ学園」では、実践において重症児の「発達保障」は追求されつつも、現場のニーズに応じて「QOL」の追求や「生活」という視点、そして「地域」のなかの重症児や学園という捉え方を打ち出した。

「第一びわこ学園」における新しい理念や療育の視点獲得の背景には、第1期および第2期における高谷の思索や実践が強く影響していると考えられる。なぜなら高谷は、虚弱児に取り組んだ実践のなかで「いのち」を守ることに何よりも真摯に取り組み、彼らの「生きる力」を強めるために「生活」の一コマ一コマを保育として捉えて大事にし、外来診察や短期療育の受け入れ、巡回訪問、通園事業の開始、そして「抱きしめてBIWAKO」の成功と、施設と地域が架橋された「まちづくり」を志向したからである。

高谷の思想・思索と学園の理念および実践は、重症児を核にしながら往還し、そこで提起された「いのち」や「快」、「生活」の保障、そして「心」への洞察、「生きる」ことの意味の

追究は、現在においても「第一びわこ学園」の療育実践の本質をなしている。高谷が言い換えた「ヨコへの広がり」は、「ヨコへの発達」では収まりきらない、こうした療育観の変遷を含意していると考えられる。びわこ学園においては、超重症児の割合が増加し、療育の対象が質的に変化している。そうしたなか、「ヨコへの発達」で重症児の「発達」を捉えた時代から、超重症児を含んだ療育観の構築が求められる時代に突入している。こうした時機にあって、高谷の到達した「ヨコへの広がり」は、新たな可能性を持つ療育思想といえるのではなかろうか。

今後は、高谷が、1970年代には積極的に取り入れ、また1990年代以降には再検証の対象とした田中の「階層-段階」理論における「ヨコへの発達」の展開の詳細について分析する作業が残されている。そして、1950～60年代に創出された「ヨコへの発達」を、田中、高谷の展開を踏まえて、我々がいかに継承・発展させていくべきかを検討していくことが大きな研究課題である。

(うない あかり)

表2 高谷清の障害児・者療育・医療等に関する著作物

No.	文献	雑誌／書籍	発行年	頁数	備考
1	障害者に医療を	「みんなのねがい」, 第8号	1970	8～11	
2		『変革の医療』	1971	36～74	共著
3	全面発達をめざす医療医学をつくっていこう—第一回障害者医療問題合宿学習会の報告	「みんなのねがい」, 第11号	1971	31～33	
4	「問題行動」を発達要求ととらえて(1)—発達と生活環境にかかわって、発達の意味を考える	「季刊小児の精神と神経」	1972	16～23	共著
5	障害者の権利をうばっているものは何か	「みんなのねがい」, 第23号	1972	20～23	
6	森永ヒ素ミルク中毒事件と人工ミルク	「保育問題研究」, 第39号	1972	84～90	
7	医療と発達に関して	「みんなのねがい」, 第25号	1972	8～13	
8	重症心身障害児問題	『市民と医療』	1972	170～183	○
9		『日本の子どもたち』	1973		共著○

No.	文献	雑誌／書籍	発行年	頁数	備考
10～25	連載 障害者の医学・医療（1）～（15）	「みんなのねがい」, 第39号～第54号	1973-1974		連載
26	障害者の人権	「ジュリスト」, 第548号	1973	73～77	
27	急進主義的傾向とその批判	「健康會議」, 第25巻第8号	1973	26～33	共著
28	障害児問題	「地域保健」	1974	78～80	
29	障害者保障の思想	『写真記録 人間として生きる』	1975	62～69	共著
30		『子どもの発達と障害』	1976		○
31	びわこ学園の現状と今後	「びわこ学園だより」, 第10号	1979	9～10	
32	びわこ学園の将来—将来構想委員会からの報告—	「びわこ学園だより」, 第12号	1979	4～5	
33	障害児へのとりくみと課題—岡崎英彦著『障害児と共に三十年』出版に際して	「健康會議」, 第40巻第4号	1979	31～34	
34		『障害者医療の思想』	1980		共著
35	<講演> 障害を持つ子どもの医療と発達について	「平安女学院短期大学幼児教育研究所年報」, 第2号	1980	1～11	
36	障害児—発育保障	「保健婦雑誌」, 第36巻第10号	1980	88～102	○
37	国際障害者年と障害者運動障害児の発達権確保をめざして	「理学療法と作業療法」, 第14巻第12号	1980	821	
38	国際障害者年にあたって重症心身障害児へのとりくみから	「医学評論」, 第68号	1981	4～7	
39	障害者医療の実践が示すもの 連載「民医連と障害者医療・第一線からのレポート」をふまえつつなぜ障害者医療なのか	「民医連医療」, 第113号	1981	52～62	
40	障害児者のため医療のネットワークを	「さざなみ」, 第13号	1982	9	
41	声なき声がみえてくる	「みんなのねがい」, 第160号	1982	14～17	
42		『重症心身障害児：びわこ学園からの報告』	1983		
43		『重症児のいのちと心：びわこ学園レポート』	1983		
44	障害の早期発見と早期療育のとりくみ	「保健婦雑誌」, 第40巻第7号	1984	134～143	
45	福祉と医療—重症心身障害児の療育をめぐる	「季刊社会保障研究」, 第20巻第2号	1984	200～205	
46	障害を持つ子の健康を考える	「療育の窓」, 第80号	1984	3～5	
47～58	連載 北欧に生きる障害児と人びと（1）～（11）	「みんなのねがい」, 第196号～第207号	1985		
59	重症心身障害児への取り組み	「保健婦雑誌」, 第41巻第7号	1985	65～77	
60	ショート タイムホーム	「世界の児童と女性」, 第19号	1985	55～56	
61	握手しよう	「びわこ学園だより」, 第32号	1986	1	
62	障害者「問題」の起源と現代	『発達保障の探究』	1985	3～53	共著
63	奇型をもつ子の保育上の注意	「みんなのねがい」, 第213号	1986	38～39	
64	報告 連帯の土壌を考える—協同・分配・平等の獲得が人間を人間にした	「労働法律旬報」, 第1174号	1987	6～15	

No.	文献	雑誌／書籍	発行年	頁数	備考
65	討論 弱者はなぜ「より豊かさ」への「多面的」な連帯のテーマたりうるか—弱者を世の光とした人間関係・連帯の可能性	「労働法律旬報」, 第 1174 号	1987	16 ~ 38	共著
66	分科会 障害児の取り組みを見直す	「保健婦雑誌」, 第 44 巻第 7 号	1987	45 ~ 61	
67		『嘔吐』	1987		
68	寄稿 ぐるっと琵琶湖二十万人!!	「みんなのねがい」, 第 230 号	1987	78 ~ 79	
69	障害と医療機関 すべての人の全人間的復権のために	「みんなのねがい」, 第 241 号	1987	36 ~ 39	
70	重症心身障害児の地域療育	「びわこ学園だより」, 第 34 号	1987	2 ~ 3	
71	岡崎先生の想いを引き継いで	「びわこ学園だより」, 第 36 号	1987	2 ~ 3	
72	重い障害をもつ子供たちに連帯する人間の心意気を	「びわこ学園だより」, 第 35 号	1987	1	
73	他の世界への探検	「びわこ学園だより」, 第 38 号	1988	3	
74	最近の重症心身障害児をめぐる問題	「びわこ学園だより」, 第 42 号	1989	2	
75	“ともに生きる” 人間の本性を考える—やさしさと平等原理を求めて	「賃金と社会保障 = Wage & social security」, 第 1004 号	1989	19 ~ 28	
76	重症心身障害児(者)へのかかわり	「看護実践の科学」, 第 15 巻第 4 号	1990	59 ~ 64	
77	障害者の生きる糧に	「月刊保団連」, 第 350 号	1991	14 ~ 15	
78	障害者医療研究集会のこと	「人間発達研究所紀要」, 第 5 号	1991	159 ~ 161	
79	新たなる出発 構想から 12 年 第一びわこ学園移転開設	「びわこ学園だより」, 第 47 号	1991	2 ~ 3	
80	『発信』していきたい	「びわこ学園だより」, 第 48 号	1991	1	
81	生活することを支える「福祉医療」の発展を	「月刊保団連」, 第 358 号	1991	6 ~ 8	
82	聞こえぬ声に耳を傾けて重症心身障害児施設でのとりくみ	「ナースアイ」第 5 巻第 3 号	1992	39 ~ 43	
83	障害者と医療 障害者医療をめぐる	「みんなのねがい」, 第 285 号	1992	46 ~ 51	
84	「第一びわこ学園 移転後一年のあゆみ	「びわこ学園だより」, 第 50 号	1992	2 ~ 3	
85	「びわこ学園をめぐる外部と内部の状況」	「びわこ学園だより」, 第 51 号	1992	3	
86	障害者と看護 障害児の医療に取り組むはじめて	「看護実践の科学」, 第 19 巻第 2 号	1994	58 ~ 59	
87 ~ 97	障害者と看護	「看護実践の科学」, 第 19 巻第 3 ~ 13 号	1994		連載
98 ~ 110	障害者と人類	「看護実践の科学」, 第 20 巻第 1 ~ 12 号	1994		連載
111	まさに挑戦の日々	「びわこ学園だより」, 第 55 号	1994	3	
112	三病棟開設なる	「びわこ学園だより」, 第 56 号	1994	3	
113	三病棟開設とその後の課題	「びわこ学園だより」, 第 57 号	1994	1	

No.	文献	雑誌／書籍	発行年	頁数	備考
114	天皇、皇后両陛下、第一びわこ学園に来園される	「びわこ学園だより」, 第 58 号	1995	2～3	
115		『支子 障害者と家族の生』	1996		
116	びわこ学園の誕生とその後	『消シテハナラヌ世の光 近江学園創立五〇周年記念誌』	1996	82～84	
117	重症児施設の変化について	「びわこ学園だより」, 第 62 号	1996	1	
118	施設における小児慢性神経疾患の QOL	「脳と発達」, 第 28 号	1996	202～205	
119	問題研究のモデルとして 第一回 ケースカンファレンス	「びわこ学園だより」, 第 66 号	1997	2	
120		『はだかのいのち：障害児のこころ、人間のこころ』	1997		
121	障害者の健康・総論「障害者の健康を考える」	『障害者の健康と医療保障』	1997	3～26	共著
122		『透明な鎖：障害者虐待はなぜ起こったか』	1999		
123	退職にあたって	「びわこ学園だより」, 第 67 号	1998	3	
124	わが作品を語る—『透明な鎖—障害者虐待はなぜ起こったか』	「部落」, 第 52 巻第 5 号	2000	70～71	
125		『埋め立て地からの叫び：ある住民運動の記録』	2001		
126	特別寄稿 いのちとこころ	「みんなのねがい」, 第 398 号	2001	24～27	
127	大会テーマ招待講演 障害者福祉の基本理念	「社会事業研究」, 第 42 号	2003	4～20	
128		『こころを生きる：人間の心・発達・障害』	2003		○
129	内外のうごき 障害者への「人格権の侵害」を許さず、県と国の責任を明らかにした画期的判決—サン・グループ事件裁判	「知的障害福祉研究」, 第 50 巻第 5 号	2003	54～57	
130		『異質の光』	2005		
131	子どもの心には何があるのか	「母と子の健康」, 第 43 号	2005	2～5	
132	人間の「内面感覚」の快と不快について考える—重い心身の障害のある人への医療や日常のとりくみを通して—	「医学評論」, 第 106 号	2006	10～15	
133	糸賀一雄の思想「自己実現」を考える：「自己」とはどういう存在か、その「実現」はどのようなことか(発達保障論をめぐる理論的問題)	「障害者問題研究」, 第 34 巻第 4 号	2007	308～316	
134	障害者自立支援法は人が生きる希望を奪う	「母と子の健康」, 第 47 号	2007	2～9	
135	「ヨコへの豊かさ」と「タテへの発達」	「人間発達研究所通信」, 第 110 号	2007	8～11	○
136	「発達」と「退行」	「人間発達研究所通信」, 第 113 号	2007	3～14	
137	「発達」と「人格」	「人間発達研究所通信」, 第 112 号	2008	3～11	

No.	文献	雑誌／書籍	発行年	頁数	備考
138		『こどもの心・大人の眼：人間・障害・思想』	2008		○
139	「闇」と「光」―「この子らを世の光に」が語ること―	「人間発達研究所通信」, 第114号	2008	4～12	
140	「自立」と「自己決定」と「自分探し」	「人間発達研究所通信」, 第115号	2008	9～14	
141	「外在意識」と「内在意識」	「人間発達研究所通信」, 第116号	2009	3～8	
142	「可逆操作力」と「可逆操作関係」	「人間発達研究所通信」, 第118号	2009	8～13	
143	「そのまま」と「ありのまま」	「人間発達研究所通信」, 第117号	2009	3～8	
144	「対称性原理」と「可逆操作」―階層間の飛躍的移行―	「人間発達研究所通信」, 第119号	2009	9～14	
145	発達するということ, 障がいがあるということ	「母と子の健康」, 第52号	2009	26～28	○
146	「生産諸力／生産諸関係」と「可逆操作力／可逆操作関係」	「人間発達研究所通信」, 第120号	2010	7～12	
147	「発達」と「人格」(1)―あざな(糾)へる縄の如く―	「人間発達研究所通信」, 第121号	2010	6～11	○
148	「発達」と「人格」(2)―交流の手段・発達の自由―	「人間発達研究所通信」, 第122号	2010	7～11	
149	障害者の人権	『リーディングス日本の社会福祉 第7巻』	2011		共著
150		『重い障害を生きるということ』	2011		○
151	「パーソン論」は、「人格」を有さないとする「生命」の抹殺を求める	「月刊保団連」, 第1069号	2011	39～46	
152	「障害者医療」とはなにか	「月刊保団連」, 第1114号	2013	4～9	
153	「パーソン論」と障害児者にかかわる生命倫理	「障害者問題研究」, 第40巻第4号	2013	312～315	
154	重い障害のある子どもが大切にされる社会の大事さ	「しがの保険医」, 第332号	2013	2～3	
155	人間と人間の「関係」を考える―「重い障害を生きるということ」(岩波新書)延長戦―	「母と子の健康」, 第57号	2013	2～4	
156	糸賀一雄の思想と「今日の福祉」	「滋賀社会福祉研究」, 第16号	2014	8～12	
157	障害のある人の生きるよろこびと「生命倫理」―人間という存在と「発達保障」	『全障研第48回全国大会報告集』	2015	42～51	○
158	編集部が迫る！ 発達保障ってなんですか？ その1	「みんなのねがい」, 第584号	2015	8～9	
159	編集部が迫る！ 発達保障ってなんですか？ その2	「みんなのねがい」, 第585号	2015	10～11	
160	編集部が迫る！ 発達保障ってなんですか？ その3	「みんなのねがい」, 第586号	2015	10～11	
161	かけがえのない生命よ：人間という生きものを考える	「労働と健康」, 第41巻第5号	2015	5～9	

注) 備考欄○印は、「ヨコへの発達」が記述されていることを示す。

謝辞

本研究を進めるにあたっては、高谷清氏に何度もインタビューやメール、手紙等で質問や聞き取りをさせていただき、いつも丁寧に応じてくださった。高谷清氏に心より感謝申し上げます。

注

- i 抱きしめて「BIWAKO」とは、「生命、自然」をキーワードに1987年11月8日212900人の参加と資金・メッセージの参加51300人（計264200人）の参加で、琵琶湖一周を人の手でつなぐことに成功したイベント。参加者は一人千円の参加費を持参し、集まった資金の一部は「第一びわこ学園」の新築移転費用に寄付された。
- ii ここでの「人格の発達」は、「人間の心の発達」であるとし、具体的には、「他の人に対する思いやり、勇気あるいは連帯の気持ち」としている（高谷，1976）。
- iii 古代の人々は障害者や高齢者という「社会的弱者」とともに生活していたことを指摘している（高谷，1987a，1989）。
- iv 「ヨコへの広がり」「ヨコへの豊かさ」「ヨコへの拡大」は、同様の内容を示しているが、「豊かさ」では価値観や内容的な意味を有しているため、「広がり」という中立的な言葉が最適である（2015年1月16日筆者による高谷氏へのインタビューで確認）。
- v 「フカサ」とは人類の「共通性」であり、「人との共感、共同、協力のよるこびである」としている（高谷，2009）。

文献一覧

- 岡崎英彦・小池清廉・森敏樹（1966）「重症心身障害児療育の基本的問題」『心身障害者福祉問題研究叢書第1集』心身障害者福祉問題総合研究所。
- 加藤直樹・高谷清（1971）『変革の医療：障害者と医療の権利』鳩の森書房，54-55。
- 加藤直樹（2007）「集団と発達保障（2）」『障害者問題研究』35（3），231-235。
- 小坂淳子（2005）『『異質の光——糸賀一雄の魂と思想——』高谷清著，大月書店，2005年4月』，大阪健康福祉短期大学紀要，4，115。
- 社会福祉法人びわこ学園（1981）「55年度の特徴」『昭和55年度報告』昭和55年度報告編集委員会編，社会福祉法人びわこ学園，23。
- 社会福祉法人びわこ学園（1988）「私たちの障害児療育の理念」『びわこ学園年報——1987（昭和62年度）報告』1987年度報告編集委員会編，社会福祉法人びわこ学園，23。
- 社会福祉法人びわこ学園（1978）「保育・生活・機能訓練」『創立15周年記念誌 びわこ学園の15年 1963-1978』15周年記念誌編集委員会編，社会福祉法人びわこ学園，106-108。
- 社会福祉法人びわこ学園（1983a）「療育プログラム形成過程への視点」『創立20周年記念誌 びわこ学園の20年 1963-1983』20周年記念誌編集委員会編，社会福祉法人びわこ学園，195-200。
- 社会福祉法人びわこ学園（1983b）「A群の療育のまとめ」『創立20周年記念誌 びわこ学園の20年 1963-1983』20周年記念誌編集委員会編，社会福祉法人びわこ学園，179。
- 社会福祉法人びわこ学園（1983c）「年少で虚弱な子どもたちから学んできたこと」『創立20周年記念誌 びわこ学園の20年 1963-1983』20周年記念誌編集委員会編，社会福祉法人びわこ学園，9。
- 社会福祉法人びわこ学園（1995）「1994年度をふりかえって」『びわこ学園年報 1994年度報告』1994年度びわこ学園年報編集委員会編，社会福祉法人びわこ学園，33。
- 社会福祉法人びわこ学園（1998）「生命、自然に21万人の輪」『びわこ学園便り』，No.37，2-3。
- 社会福祉法人びわこ学園（2012）「あいさつ」『びわこ学園年報 2011年度報告』2011年度びわこ学園年報編集委員会編，社会福祉法人びわこ学園，1。
- 高谷清（1972）「重症心身障害児問題」『市民と医療』日本評論社，170-183。
- 高谷清（1976）『子どもの発達と障害』医療図書出版社，96。
- 高谷清（1980a）「障害児の発達権確保をめざして——国際障害者年と障害者運動」『理学療法と作業療法』14（12），821-823。
- 高谷清（1980b）「障害児——発育保障」『保健婦雑誌』88-102。
- 高谷清（1983a）『重症心身障害児：びわこ学園からの報告』青木書店，28-177。
- 高谷清（1983b）『重症児のいのちと心：びわこ学園療育レポート』青木書店，208-216。
- 高谷清（1985）「重症心身障害児への取り組み」『保健婦雑誌』41（7），65-77。

- 高谷清（1987a）「報告 連帯の土壌を考える——協同・分配・平等の獲得が人間を人間にした」『労働法律旬報』1174, 6-15.
- 高谷清（1987b）「重い障害をもつ子どもたちのこと」『思想と現代』9号, 白石書店, 38-41.
- 高谷清（1989）「“ともに生きる”人間の本性を考える——やさしさと平等原理を求めて」『賃金と社会保障 = Wage & social security』1004, 19-28.
- 高谷清（1998）「人間という生き物について（2）——人間の発達と障害を通して考える」『母と子の健康』第29号, 24-27.
- 高谷清（2003）『こころを生きる：人間の心・発達・障害』三学出版, 3-4.
- 高谷清（2005）『異質の光』大月書店, 261.
- 高谷清（2007）「『ヨコへの豊かさ』と『タテへの発達』」『人間発達研究所通信』110, 6-10.
- 高谷清（2008）「『発達』と『人格』」, 『人間発達研究所通信』113, 7-9.
- 高谷清（2009）「発達するということ, 障がいがあるということ」『母と子の健康』52, 26-28.
- 高谷清（2010）「『発達』と『人格』（1）——あざな（糾）へる縄の如く」『人間発達研究所通信』121, 6-10.
- 高谷清（2011）「『パーソン論』は、『人格』を有さないとする『生命』の抹殺を求める」『月刊保団連』1068, 39-46.
- 高谷清（2013）「『パーソン論』と障害児者にかかわる生命倫理」『障害者問題研究』40（4）, 312-315.
- 高谷清（2014）「発達論的エッセイ」から, 未公開手記
- 高谷清（2015a）「編集部が迫る！ 発達保障ってなんですか？ その1」『みんなのねがい』4月号, 8-9.
- 高谷清（2015b）「障害のある人の生きるよろこびと『生命倫理』——人間という存在と『発達保障』」『全障研第48回全国大会報告集』42-51.
- 高谷清（2015c）「編集部が迫る！ 発達保障ってなんですか？ その3」『みんなのねがい』6月号, 10-11.
- 田中昌人（1967）「シンポ『幼児の行動発達と就学年齢』第4報告 発達保障の立場から」『日本心理学会第31回大会「大会発表論文集』, 大泉溥編（2011）『日本の子ども研究——明治・大正・昭和——第13巻, 田中昌人の発達過程研究と発達保障論の生成』クレス出版, 74-75.
- 牧野広義（2013）「高谷清著『重い障害を生きるということ』（岩波新書 2011年）を読んで」『人間発達研究所紀要』26, 144-147.
- 渡部昭男（2004）「重症児の授業づくり」『重症児教育』兵庫重症心身障害児教育研究集会実行委員会編, クリエイツかもがわ, 18-36.